山田 勝仁さんの投稿

山田 勝仁
2024年12月10日 ·

知の巨人、演劇評論家の鴻英良さんが亡くなった。
　演劇だけでなくフィールドは広く、青森県の下北半島核半島化にも関心を寄せ、大間原発も見に来た。
　穏やかで優しくて、知性にあふれて。
　いつもいつも優しく接してくれた。ずっと前から体調が悪いのは知っていたが、まさかこんなに早く亡くなるなんて。
　演劇界にとっても大きな損失だ。

　つい最近、座・高円寺で会ったばかりだ。

　　2012年に日本映画大学教授に招聘されたが、学内で政治的活動をしない旨の誓約書にサインさせようとしたため、拒否して就任しなかった。学問の徒としてスジを通した。反骨の人。高取英さんの月蝕歌劇団の打ち上げでいつも一緒になった。

　鴻さん、そりゃないよ。

淋しいよ。早すぎる。

長峰 麻貴さんの投稿

長峰 麻貴
2024年12月10日 ·

突然とびこんできた、鴻英良さんの訃報に動揺している😭
調子が悪いとはお聞きしつつ、、予告なくあらわれたらニコニコ〜って朗らかにお元気で、大丈夫じゃん👌とホッとしていた矢先でした、、。。最後にお会いしたのは、つい先日、流山児★事務所40周年記念公演「冥王星の使者」で、巻上さんが音楽監督されてたので、みにいった時に偶然お会いして高取英さんの話やらなんやらしてくれて、「打ち上げでるの？」て聞かれたから、、「あしたがあるから〜」て言ったら、「ぼくはあしたがないから〜」て笑顔で返され、なんかみんなで爆笑して、🤣そんな冗談言えるからまだまだ大丈夫だって思ってたんですよ‼️鴻さん‼️
もっともっとはみ出し演劇やアートのお話聞きたかったです😭カバコフのはなしも寺山修司のはなしも、カントールも
鴻さんを通してきくと生き生きとしていて、ずーっと聞いてられました‼️

2件以上

Atsushi Andoとしてコメント

Santa Yamakawaさんの投稿

Santa Yamakawa
2024年12月11日 ·

鴻英良さんが亡くなったという。
76歳か‥‥。
周辺の人達が次々にいなくなるなぁ。
鴻さんは私がまだ劇団を主宰していた当時、よくうちの稽古場に遊びにきてた。というか、正確にはご飯を食べにきてたと言った方がいいかな。大学院を出たてで、貧乏だったからな。一緒に真鶴の種村李弘さん宅に遊びに行ったのは、ちょうど浅田彰の『構造と力』が話題になってた頃だから、1983年か。もう40年以上前のことだ。
最後に一緒に飲んだのはニューヨークのアパートメント。彼は文化庁の派遣研修期間中だった。同じアパートには、現在世田パブ館長の高萩さんや、芸劇の内藤さん達がいた。あれが90年頃だから、もう30年以上会ってないけど、かつて周辺にいた人達がいなくなるのは本当に寂しい。
下の写真はずいぶん若い頃のものだろう。今の仙人のような姿は私の知っている鴻さんじゃないからな。
合掌🙏

Atsushi Andoとしてコメント

江戸 伝内さんの投稿

江戸 伝内
2024年12月11日 ·

鴻英良さんが逝ってしまった。

鴻さんとは2011年9月「アルトー24時」公演の時にドゥルーズ役で出演して頂き、

千秋楽の打ち上げをした後、演出の芥正彦さん、アルファエージェンシーの万代さん、私と結城民子と息子の敬太（現・結城一糸）、そして鴻さんと二次会で始発まで飲んだことを思い出す。明け方の朝日に浮かぶ赤坂のビルがとても美しかったのを覚えている。（飲んだと言っても私と民子、敬太は下戸のため、一滴もお酒は口にしていない）

その時、福島原発事故の話しになり、鴻さんと芥さんで「福島オデュッセイア」をやろうという話しになった。船に乗り海から福島に上陸するところから始まる。

芥さんから一糸さん（現・伝内）も参加してよ！と言われてワクワクしたのを覚えている。残念な事にこの話しは実現しなかった。

そういえばその時に鴻さんから哲学者のシモーヌ・ヴェイユの影響を受けたと聞いた。私もシモーヌ・ヴェイユには大変興味を持っていたので、その話しを興味深く伺った。

その後2023年10月、Ｆ/カフカの『猟師グラフス』をシアタートラムで上演した際、トークに参加して頂き司会までして頂いた。トークのお願いをした時、大変魅力的な企画の話しを有難うございます。ととても喜んで下さり、劇場に入りゲネプロからトークの日まで毎日舞台を観劇され、トークに臨んで下さった。

その御恩もかえせない内に、逝ってしまわれた。

全くの同世代、私は1948年3月13日生まれ、鴻さんは3月18日生まれ。まるで兄弟を失ったような気持ちだ。

もっと鴻さんとシモーヌ・ヴェイユの話しをしたかった。残念至極としか言いようがない。合掌。

Atsushi Andoとしてコメント

佐藤 信さんの投稿

佐藤 信
2024年12月11日 ·

鴻英良さんが亡くなった。喪失感と悲しみで言葉もない。
写真は座・高円寺で上演したの鴎座『演劇島』のプレスタディリーディング第三回（９月21日）で、「金島演劇論」を語る鴻さん。プレスタディリーディングには他の講師の回もふくめて全四回のすべてに出席、11月８日からの上演にも２回重ねて足を運んでくれた。
盟友佐伯隆幸とともに、遠方への視線を率直に語り合い、ゆたかな言葉を語り聞かせてもらえる友がまたひとりいなくなってしまった。
瞑目して、旅立ちを見送る。

Atsushi Andoとしてコメント

山田 勝仁さんの投稿

山田 勝仁
2024年12月11日 ·

一夜明けても鴻英良さん(享年76)の死のショックがどんよりと胃の腑のあたりに残る。

　芝居のアフタートークで、「20世紀は革命と戦争の時代だったが21世紀は『革命なき戦争の時代』だ」と言った鴻さんが、「時代に抗する夢の回路としての役割が演劇に求められているのではないか」と言ったのが心に残る。
　演劇は制度に絡めとられるのではなく、自由であり続けるために常に制度から遁走し続ける。そのためのインプロだったのではないかと。

なぜ本州の最果ての原発の現場まで足を運んだのか、と聞いたら、「僕は理系だった(東工大から東大大学院)から、原子物理学に進んでいたかも知れない。原発問題は自分の問題でもあるんだ」とおっしゃった。

　見上げるような知の巨人だったが、それをひけらかす事なく謙虚で、私のような者にでも優しく接してくれた。

　30年くらい前、芝居の打ち上げで、酒癖の悪い役者が、「評論家は大嫌いなんだ」と隣りの席の鴻さんの頭をポカポカ殴ったのでハラハラしたが、鴻さんは、にこやかな笑みを絶やさず、されるがままだった。
　しかし、権力の横暴に対しては毅然と立ち向かった。2013年に日本映画大学の教授に推されながら、大学側の「学内で政治活動をしてはいけない」との念書に反発して教授の職を蹴った。その気骨よ。

　行動するインテリだった鴻さん。あなたがいないと淋しいよ。

https://www.facebook.com/share/p/PXusyBmMYBrn4e7Q/?

森田 曉さんの投稿

森田 曉
2024年12月11日 ·

鴻英良さんが、12月6日早朝、他界された由、連絡を受けました。合掌。

猿の演劇論
2023年12月2日 ·

本日、12月2日（土）15:00- 猿の演劇論特別編@無為フェス/BUoY最終回です！

第3回目にて最終回となる今回は「ギリシア・キリスト教的世界の終焉と演劇の未来」と題して、アガンベンの収容所論から現代のビオス・ポリティコス、ポリス的な生のあり方がどのように展開しているのか、を分析し、21世紀の演劇について考えます。

第2回目 「アガンベンの錯乱–監獄から収容所へ、で、その先は・・・」のレポートをUPしました！ → https://x.gd/QdeMn

各回講義の概要はチラシよりご覧ください。
→ https://x.gd/lH8Mo
当日の資料・お席などの準備があるため、下記のアドレスへ事前のお申し込みをお願いします。
--
講座概要：
2023年11月18日（土）、25日（土）、12月2日（土） 各日15:00-18:00 (全3回)

Atsushi Andoとしてコメント

鈴木 晶さんの投稿

鈴木 晶
2024年12月11日 ·

演劇評論家の鴻さんが亡くなった。
露文の大学院の先輩だった。
彼はたしか東工大を出て、専売公社に就職し、その後仕事を辞めて、東大の露文大学院に入ってきた。
たくさんおしゃべりをし、議論をし、酒を飲んだ。
彼は、修士課程は修了したが、博士課程に進学することができなかった。これは事実上の「破門」だ。指導教授に快く思われていなかったからだ。
以後、彼はロシア文学界から姿を消し、演劇（評論）の世界で有名になった。
一度、泥酔した鴻さんに無理やりキスをされ、舌を入れられ、吐きそうになったことがある。笑
今となっては、懐かしい思い出だ。

> **猿の演劇論**
> 2024年12月10日 ·
>
> 鴻英良逝去のお知らせ
>
> 2024年12月6日早朝　鴻英良が永眠いたしました
>
> お別れの会などについては後日お知らせいたします

あなた、他19人

悲しいね　コメントする　シェア

Atsushi Andoとしてコメント

長峰 麻貴さんの投稿

長峰 麻貴
2024年12月13日 ·

鴻英良さん

ナムジュンパイクが美術家の風倉匠さんのことを「世界でいちばん無名な有名人」と敬意を込めて称したエピソードがあるが、
鴻さんもそんな人だった。
圧倒的な知識をもつ知の巨人なのに、それをひけらかすことはなく、権力に屈せず、
晩年は演劇評論家でなく演劇研究家でありたいと、貪欲に広い眼差しで世界を読み解き、
明晰で穏やかな語り口で楽しいお喋りを聞かせてくれた。

鴻さんとは、巻上公一さんを通して知り合った。はじめてお会いしたのは熱海未来音楽祭でイリヤ・カバコフのプロジェクト宮殿「自分をより良くする方法」からインスピレーションをうけた「天使になるためのレッスン」というワークショップで天使の羽をつくりにきてくれた。
カバコフとのエピソードを語りながら、無心で手を動かして楽しそうに羽を切られてたのがとっても印象に残っている。「カッターでかるく筋をいれると綺麗に折り目がつくんだね！」とキラキラした目で言われて、、

いくつになっても好奇心旺盛な少年のような鴻さんが大好きでした💓

その時の様子を誰に頼まれるでもなく、鴻節のレポートにしてくださり、わたしのワークショップのことも丁寧に記してくださり、それは私の宝物です✨✨舞台美術家って裏方でもあるからそんなに書いていただくことってあまりないので。いつか載せようと思っていた鴻さんの文章です。鴻さん今頃イリヤ・カバコフさんとあえたかなあ。カバコフのうちに行って熱が出ちゃってカバコフのベッドで眠らせてもらったことを何度も嬉しそうにお話ししていたから‼️またいつかお会いしましょう😌
それまで、わたしは鴻さんみたいな距離感で演劇やアートを自分のことばで軽快にワクワクするように話し伝えていけるようにまだまだ貪欲に学びます‼️

演劇をやることは哲学をやることでもあるから。

https://note.com/makigami/n/n398bc994c93a?sub_rt=share_b

世界が浮遊する、多様に変貌する遊歩の空間
——熱海未来音楽祭の魅力ーー

鴻英良

ここはどこだろう。熱海銀座ゲストハウスマルヤから街中へ、そして起雲閣音楽サロンへ、あるいは細くて急な石段を登ってどこかの廃屋の展望室へ、そしてまた海辺の砂浜へと、どこにいるのか、それはともかく、場所を変えて熱海の街で無数のパフォーマンスに出会う、遊歩の空間を漂う数日間、熱海未来音楽祭「口に任せて、最上の虚空を掴む」はいろいろな音と風景との出会いを皆とともに味わえる喜びの空間の連続だった。
私もそのプレイベントに誘われていた。「はみだしアートの未来」というタイトルで巻上公一と対談しないかというのだ。モスクワの屋根裏の水たまりに木製の通路を敷いたようなアトリエで、1960年代、70年代、発表することを禁じられていた作品を作っていたイリヤ・カバコフと1970年代からニューヨークの密室空間で精神の錯乱そのものを夢のような舞台にした「存在論的（るび＝オンとロジカル）ヒステリック演劇」を上演していたリチャード・フォアマンを軸に、はみだしアートの未来について話そうというのである。

Atsushi Andoとしてコメント

Mitsuyoshi Numano
@MitsuNumano

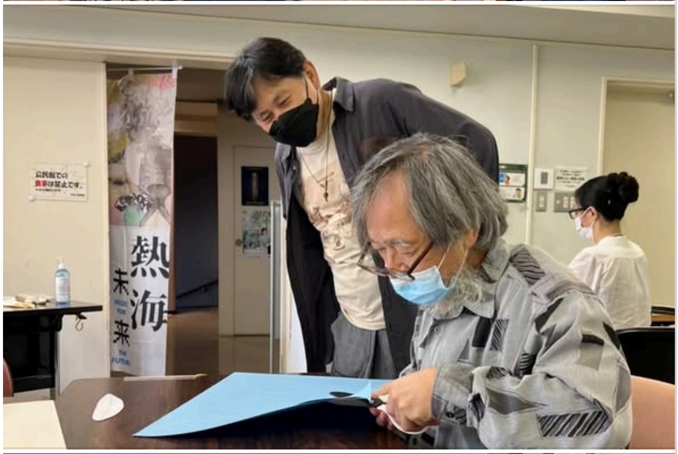
演劇批評家の鴻英良氏逝去。76歳。国際的な演劇祭の監督などでも活躍したが、基本的にフリーを貫く生き方をした。もとはロシア文学で、実は僕とは学部から修士時代の「同級生」。偏屈なまでに厳しいところがあり、僕は自分の浅薄さが見透かされているような気がして苦手だったが、とても懐かしい。

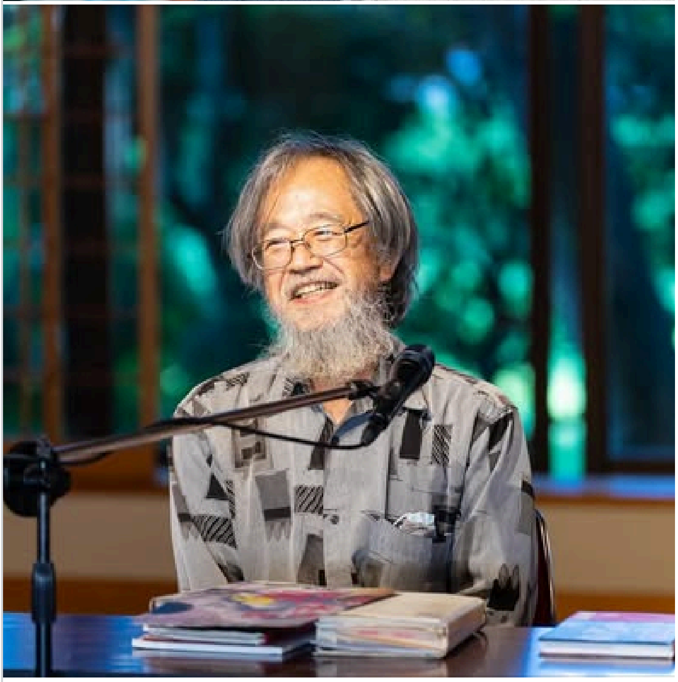
Translate post

6:54 PM · Dec 15, 2024 · **17.8K** Views

Tadashi Uchinoさんの投稿

Tadashi Uchino
2024年12月21日 ·





長峰 麻貴
2024年12月13日 ·

鴻英良さん

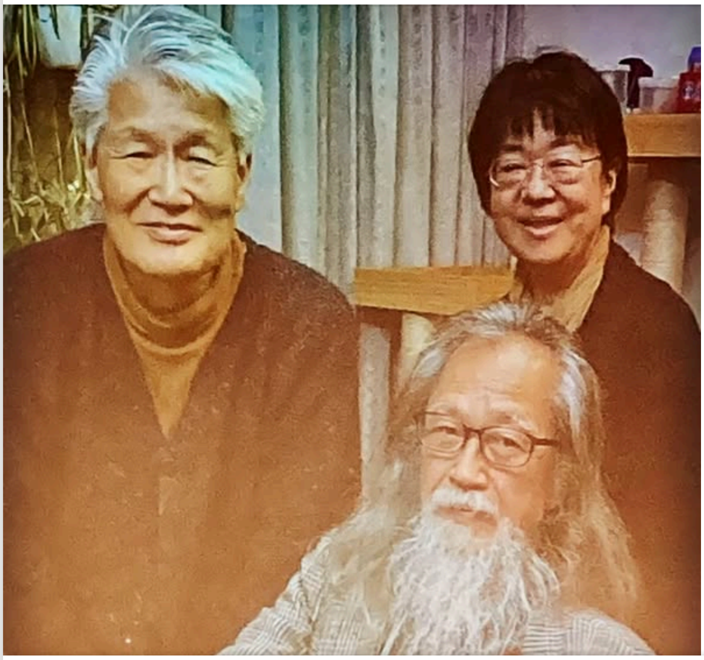
ナムジュンパイクが美術家の風倉匠さんのことを「世界でいちばん無名な有名人」と敬意を込めて称したエピソードがあるが、

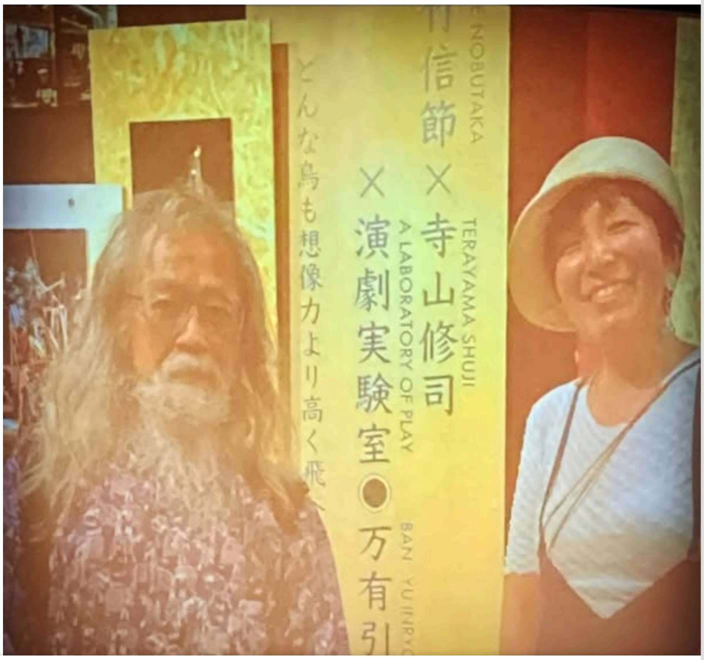
Atsushi Andoとしてコメント

志賀 信夫さんの投稿

志賀 信夫
2024年12月22日 23:39 ·

【mourn】
鴻英良さん
追悼の会
座・高円寺
アンリ・ファーブル
大勢の演劇人、舞台人が集結
彼の急な死を悼んだ
・鴻さんはかなり前からあちこちで
お会いして雑談していた
優しく本当に誠実な方だった
・檜枝岐パフォーマンスにすべて参加
されていることから
2022年10月にトークをお願いした
・最近まで舞台の現場でご挨拶していた
・以前に倒れた時はかなり心配したが
元気そうだったので、非常に驚いた
・周囲は心配していたが
本当に残念😢😢😢
https://www.facebook.com/share/p/15NyguDv5a/?mibextid=wwXIfr
・マスクした写真はそのトークの時
他の２つは追悼会で流されていたもの
　　　　　　合掌🙏🙏🙏
NS-20241221d





Atsushi Andoとしてコメント

相馬 千秋さんの投稿

相馬 千秋
2024年12月22日 ·

鴻英良先生とのお別れ会に参加し、僭越ながらアドリブでスピーチもさせていただきました。

鴻先生に初めてお会いしたのは1997〜98年くらい。早稲田大学の学部生時代に、鴻先生の授業に潜って、はじめてピナ・バウシュとかカントールの演劇に触れた。いまだにその時の授業の語り口が鮮明に思い出せるし、何から当日配布されていたプリントも持っている。その後自分がこんな仕事に就くとは全く思いもしなかった時代に、最初の一撃を頂いていいたのかと思うと感慨深いものがある。

そして日本に戻ってきてから2002年から2007年にかけて「中東シリーズ」というプログラムで、クェート、レバノン、チュニジア、パレスチナの演劇を招聘する仕事をしていた頃に一緒にお仕事をさせていただくようになり、トークに出ていただいたりしていた。今思えば当時、鴻さんはカンプナーゲルのラオコーオン演劇祭のディレクターも務められていて、世界の複数の文脈を語る稀有なお方だった。

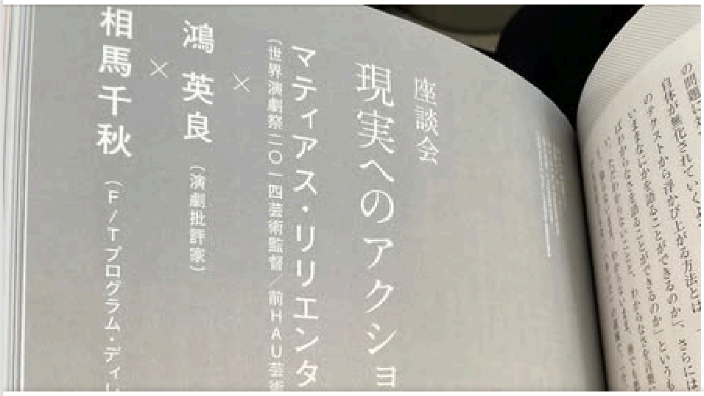
2009年からのF/Tでは、毎回、シンポジウムやトークの司会、登壇に加え、アジアに開いた公募プログラムの審査員や、F/Tドキュメントのレビューの執筆など、今思えば膨大な仕事をお願いしていた。（写真に添付したのがその一部です）私は、鴻さんのゆっくりとした口調での（ときにとっても長い！）司会が大変ありがたく、鴻さんに司会をしていただくと少し自分が賢いことを言えている気にもなった。今思えば、相当引き上げていただいていたのだと思う。

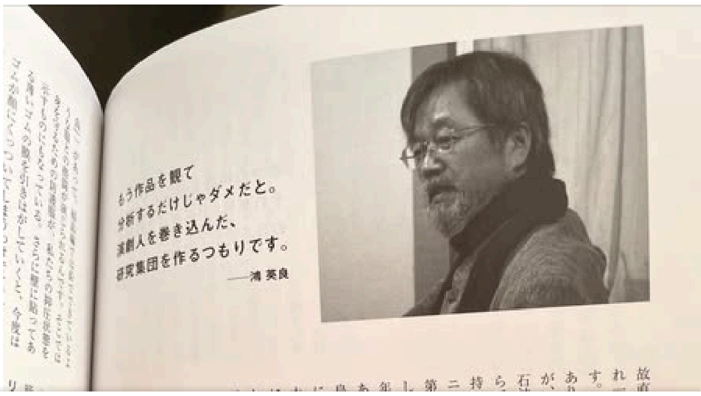
最後に公式の場でお話をさせていただいたのは、2021年末に行われた舞台芸術25号の座談会で、準備の真っ最中だった世界演劇祭について語った場。コロナ禍真っ最中でオンラインだった。

シアターコモンズ24は全演目、全イベントを参加してくださって、市原さんの「弱法師」やアピチャッポンのVRも楽しんでくださり、ぜひ総評を書いてくださいよ、とお話ししたのが最後だった。本当に依頼すれば良かったと後悔しつつ、もう十分すぎるほど私の仕事を見続けてくれ、多くの言葉を与えてくださり、世界の複数の文脈につなげて下さったと思う。

日本で全く知られていないアーティスト、地域や言語の演劇を招聘するのは、そこそこ勇気のいることなのだけれど、どんなにマイナーな地域のマイナーな演劇でも、鴻先生だけは必ず見に来てくれて、何か言ってくださるだろう、というのが自分の支えにもなっていた。

鴻さんがいない客席は、まだちょっと想像できないのだけれど、でもずっとそこにいる、と信じる自由もまた、あるように思う。「そもそも私はとっくに死んでいるんだから」というあの声さえ聞こえてきそう。



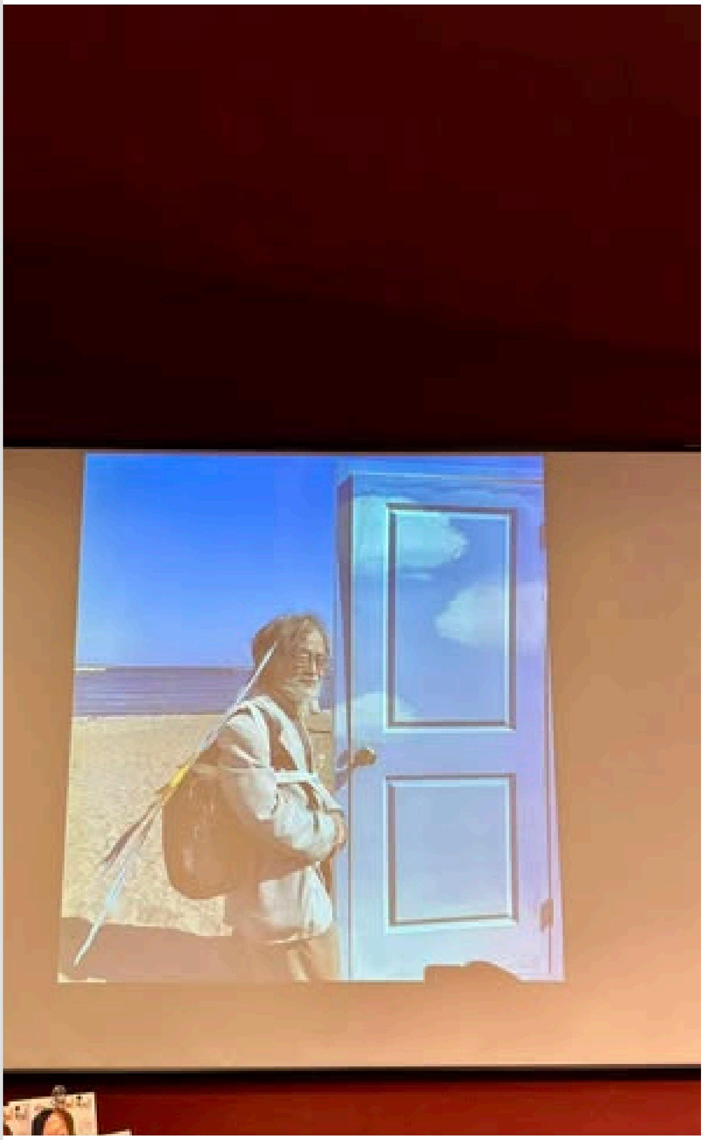


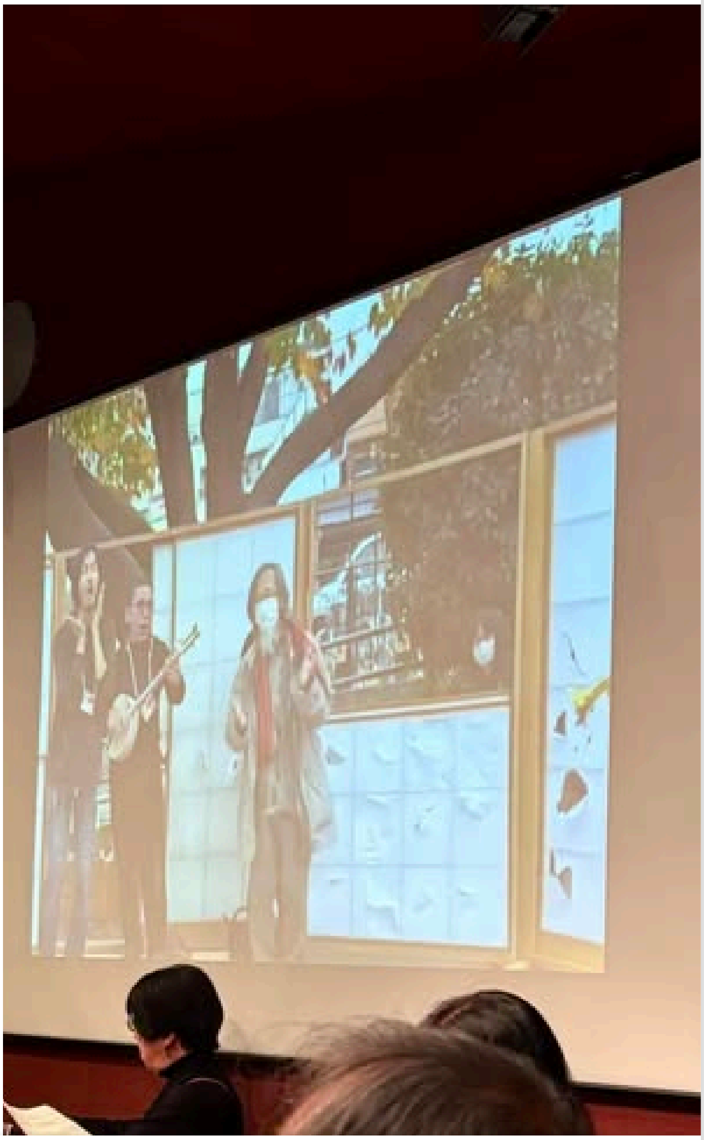
Atsushi Andoとしてコメント

福田光一さんの投稿

福田光一
2024年12月22日 13:06 ·

昨夜は座・高円寺にて、鴻英良さんのお別れの会。その前に別室で行なわれた内野儀さん、佐々木敦さん、高橋宏幸さんによる鼎談も、会での佐藤信さん、巻上公一さん、野田秀樹さん、安藤朋子さん、清水信臣さんはじめ、鴻さんのお兄様や、行きつけだった武蔵境のバーのマスターの方など、多彩な方々によるスピーチも、また会自体も虚飾がなく、清々しいもので、鴻さんのお人柄を偲ばせるものでした。
鴻さんが囲碁がお好きだったというのは迂闊にも知りませんでした。僕の棋力ではおそらく不足だったでしょうが、おなじ碁好きとしてはぜひ一局、お相手をしてみたかった。
久しぶりに再会する知人友人ら、それから意外な接点のあった方ともお話しできましたが、当の鴻さんご本人がそこにいないことが不思議でなりませんでした。
その後、朋子さんら一部の人たちと移動した居酒屋で、最後に解体社の清水さんとたまたまふたりでお話ができたとき、鴻さんの不在にあらためて胸を衝かれました。





Atsushi Andoとしてコメント

塩川伸明さんの投稿

塩川伸明さんは**亀山 郁夫**さん、**上田 洋子**さんと一緒にいます。
2024年12月23日 22:35 ·

一昨日は鴻英良氏とのお別れの会に出席し、 昨日は「戦時下の教会」公開研究会（オンライン）で松里公孝氏の報告を聞いた。とりあえず時間の順で前者から（後者については、後日改めて）。
鴻英良氏はある時期以降は演劇批評の世界で国際的に活躍するようになったが、もともとはロシア文学研究者として出発した。今からほぼ半世紀前、 彼は東工大を卒業して学士入学で東大教養学部教養学科に入ってきたので、私と彼はいわば同級生となった。彼は東工大時代に江川卓氏の愛弟子だったが、そのことが生粋東大閥のやっかみを招いた面があり、東大ではやや孤立気味だった。そういう中で、私は文学専門でなかったことが幸いしたのか、そういう人間関係にあまり巻き込まれず、彼と親しくつきあうことができた。ドストエフスキー、ソルジェニツィン、内村剛介などについていろんなことを教えてもらった。彼が演劇の世界に転じてからは長いこと接触がなかったが、10-20年ほど前、彼から連絡が2回あり、一度は世田谷パブリック・シアター、もう一度は早稲田大学での催しで報告を依頼された。前者はチェルノブイリ事件の衝撃を主題とするもので、沼野充義氏と私が報告を行なった。後者では1930年代のソ連に関する報告をした。どちらの催しでも、終了後に近所で飲み会があり、長時間話し合って、旧交を温めることができた。また早稲田の催しでは上田洋子氏と知り合うことができたが、当時若かった上田氏はその後、ゲンロンの代表取締役として大活躍するようになった（2023年度日本ロシア文学会大賞を受賞）。今回、私が鴻氏の訃報を聞き、お別れの会の日時と場所を知ったのも、上田氏を通してだった。
お別れの会に行ってみると、出席者の多さに驚いた。会場の定員の倍以上と思われる人数が押しかけたようで、ぎゅうぎゅうに混み合っていた。その大半が演劇関係者のようだったが、数少ないロシア関係者として、上田氏のほか、亀山郁夫氏も来ていて、久しぶりに長いこと会話をすることができた。これも鴻氏の引き合わせということかもしれない。沼野充義氏もツイッターに鴻氏のことを懐かしむ文章を投稿していたが、彼は健康上の理由で出席することができなかったようだ。そういうわけで、ロシア関係者はごく少数で、しかも亀山氏が所用で中座してしまったので、古い時期の鴻氏についてスピーチする役回りは私が仰せつけられた。会場の大半は彼が演劇界に入ってからの知り合いで、かつて彼がロシア文学を研究していた時期のことは知らなかったようなので、半世紀前からのつきあいについて拙い話をさせてもらった。その後、何人かの人から話しかけられたが、みな鴻氏の人柄に魅了されていたようだった。私は演劇界には全く不案内だが、著名人も何人か出席していたようで、その人脈の広さに驚かされた。

あなた、伊東 孝之、鹿島 正裕、他95人　コメント3件

超いいね！　コメントする

関連度の高い順

森田 曉
鴻さんの会、私も参加していました。四十年来の友人でした。ただし、いつも遭遇。
水戸芸術館でのイリヤ・カバコフ展では、上野駅で遭遇。今年も四月に渋谷の試写会場で、十一月に六本木の俳優座劇場前の路上で、遭遇し、二回とも喫茶店で一時間あまり歓談しました。秋には身体の不調をかなり訴えていました。

4週間　いいね！　返信する

Atsushi Andoとしてコメント

才谷遼さんの投稿

才谷遼
2024年12月23日 18:45 ·

12／21❸
座・高円寺2F cafeアンリ・ファーブルでの
〈鴻英良さん偲ぶ会〉
野田秀樹さんはじめ多くの演劇陣が集まる。
ぼくは差し入れしたチラシ寿司がうまく捌けるかが心配。
挨拶「ええ〜と、鴻さんにはまだ原稿料（ノルシュテイン講義録翻訳料)まだ払ってません。なのでこのチラシ寿司代は原稿料から差し引きますので、みなさんこのチラシ寿司は鴻さんからの奢りとおもって食べてください」
　ちょっと受けたカナ。

Atsushi Andoとしてコメント

高萩 宏さんの投稿

高萩 宏
2024年12月24日 10:58 ·

「鴻英良さんのお別れの会」。１２月２１日。

鴻さんの突然の死（１２月６日）にまだ慣れていない中、あれよあれよと言う間にお別れの会が終わりました。
　１９９２年のニューヨーク。７thアヴェニューの１５丁目にあったチェルシモアと言うアパートメントビルディングの５Tに鴻さん、うちは5Mだった。アパートといっても、戦前に建った重厚な建物で、１０階建てぐらいのガッチリした建物だった。
　写真は、その頃の鴻さん。当時44才で、僕より5つ上だったのだが、とても若く見えていて、僕はずっと年下だと思っていた。
　最初に、アパートのエレベーターホール前で会った時、コロンビア大学のアーツマネジメントの授業について、「ホームワークも多いし、討論になるとついて行くのが大変」と愚痴をこぼすと、「マスタークラスでしょ。何について話しているのがわかっているんだから、簡単なんじゃない？」と言われて、ちょっとムッとした。あの時、鴻さんはNYUの客員研究員のような立場で、学部学生に教えたりもしていたようだった。
　しばらくして、時々夜中にお互いの部屋をパジャマで訪ねたりするようになり、冬に帰国する頃には、毎週末どちらかの部屋でホームパーティーを開いていた。
　日本に帰ったら、演劇批評誌を出したい！という鴻さん、僕は国際共同作品を作っていくんだ！と日本の演劇界のは未來について語り合い、大いに盛り上がっていた。それが、僕が半年遅く帰国した後、当時のパナソニック・グローブ座の中にあった部屋を編集室に提供することで、第一期のシアターアーツの発行につながっていく。僕の方法はロベール・ルパージユとの共同制作、サイモン・マクバーニーとの「エレファント・バニッシュ」を始めとして、世田谷パブリックシアター、そして東京芸術劇場での活動につながって行った。鴻さんには、東京芸術劇場の運営委員を長く務めてもらった。
　９２年の冬のニューヨークで、何を話していたのか、全てを思い出せないのが、とても残念！！
　鴻さん、安らかにお眠りください🙏

Atsushi Andoとしてコメント

多和田 真太良さんの投稿

多和田 真太良
2024年12月27日 23:12 ·

僕なりにじっくり書きました。

ことばにならない想いだらけだ。
しかし記憶をことばに刻み付ける努力を惜しんではならない。

あの人はどんな時も
ことばにする人だったのだから。

NOTE.COM
鴻英良は広場だった｜多和田真太良
今年を振り返るために書く。鴻英良さんのことから始めたい。彼の幅広い見識と活躍については...

Hashizume Uruma、上田 洋子、他19人　シェア5件

いいね！　コメントする　シェア

Atsushi Andoとしてコメント

鴻英良は広場だった

多和田真太良
2024年12月27日 23:10

今年を振り返るために書く。鴻英良さんのことから始めたい。彼の幅広い見識と活躍については僕なんかより山ほどお付き合いのある方々が語っているので、僕はごく私的なことだけを書き連ねておこうと思う。

父とほぼ同い年の鴻さんは、僕にとっては東京の父親のような存在だった。初めてお会いしたのは大学院の授業。これほどまでに言葉を豊かに操り、枝分かれした細部にまで養分を行き渡らせ、演劇という「現象」について深層に連れて行ってくれる師はいなかった。佐伯隆幸という師と出会わなければ

ば、その出会いもなかったわけで、改めて学習院を経由したことが僕の演劇との関わりをある意味で特異にしてくれたのかもしれないと感謝している。

　鴻さんはいつも古代ギリシアを携え、20世紀のあらゆる思想哲学を纏い、それでいてどこにでも出かけ、あらゆる世代と変わらぬ姿勢で言葉の豊穣の海を渡っていた。
　それが面白くてF/Tにも、渋谷の雑居ビルで行われる怪しげな催しにも付いて行った。ゴールデン街に初めて行ったのも鴻さんに連れられて、だ。荻窪に住んでいた僕は、吉祥寺や西荻でなぜか2人で終電過ぎまで飲んだこともある。

　鴻さんも不毛だからよせば良いのに、学習院の講義の後、目白の居酒屋で佐伯隆幸としばしばもめた。印象的でよく覚えているのは、例の白ワインでしたたか酔った佐伯先生が「汚いものは舞台にあげてはならないんだ」と言い出し、鴻さんの目の色が一瞬変わった。「佐伯さん、それは反動ですよ」ヤン・ファーブルの紹介者みたいになっている佐伯先生がそんなことを言い出すなんて、という皮肉めいたニュアンスだったが、その鋭く厳しい視線を覚えている。僕はのちに佐伯先生の美意識の深層に「原爆」があることを同郷の人間として直感的に知ることになるのだが、この時はなんでも許容した上で「また揉めてしまったよ」とニヤニヤする佐伯先生にしては、嫌に変な断罪の仕方だと感じたものだ。それに対して鴻さんの、何物にも縛られない、演劇の境界を軽やかに越え、かつ巧みに構造を分析し、いかなる表現をも許容しながら存在意義を見出す温かさというか、一方で演劇に対するある意味冷めた客観性を併せ持った特異な人として魅せられた瞬間だった。

僕が今の仕事に就いてからも、極私的な立場でしばしばお世話になった。
2020年の東京芸術祭の学生鑑賞プログラムで池袋西口公園野外劇場（現グローバル・リング）での**『NIPPON・CHA! CHA! CHA!』を**観劇した玉川大学および日本大学の学生による座談会が開催された。

コロナ禍真っ只中、座談会を限られた学生とのみ隔離された会議室で行わなければならず、そのほかの学生は芸劇のロワー広場で同時中継で繋ぐ、という試みだった。いくら2元中継とはいえ、メインが会議室であることは否めず、どうにかロワー広場がメインの話題にならないか、と芝居が始まる前から頭を抱えていた。

そこへ開場中にふらっと歩いている見覚えのある姿。鴻さんだ。

こういうとき、名コーディネーター鴻さんならどんな仕切りをするかな、と下心満載で挨拶すると、かつて如月小春が実行委員長を務めていたアジア女性演劇会議で一緒に仕事をした時期がある、と話し出した。

これは、ぜひ聴きたい。

しかし予定されたゲストではないから会議室には呼べない。事務局も慣れないライブ中継で慌てるし気を使う。

「…終演後、〇〇時ごろに、ロワー広場を偶然横切ってくださいませんか。偶然、鴻英良が通ったので如月小春の想い出を語ってもらう、という芝居をしていただきたいです。お礼は後で別途僕がしますので」

面白そうだ、と悪だくみに加担してくれた。あの鴻英良に「演技」をしてもらったことになる。おかげさまでゲストを迎えて、極めて重要なエピソードを提供してくださったことで、広場が話題の中心となり、意義深い結論に至った。詳細は以下の記事に譲る。

タイトル未設定

www.tokyo-festival.jp

「極めて重要な」は鴻さんが好んで用いたフレーズだ。密かに真似している。

この時の鴻さんの言葉をヒントに、2021年3月にスタジオ収録演劇として如月小春『夜の学校』を創った。

座談会が終わり、片付けも済んで、時間が経ってしまったロワー広場に駆け下りると、寂しそうに待っていてくれた。
結構、寂しがり屋だったのかな。
最後に長い時間を一緒に過ごしたのは、昨年の6月に近畿大学東大阪キャンパスで行われた日本演劇学会全国大会でのオンライン対談「ピン・チョン氏に聞く～アメリカ演劇と民主主義」である。
こちらも内容は以下に譲る。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjstr/78/0/78_85/_pdf/-char/ja

最終日に聞き手として登壇する鴻さんは、近大東大阪キャンパス内にある「ゲスト・ハウス」に泊まることになっていた。新大阪に宿を取った僕は、大学の授業を終えて2日前の前夜祭から顔を出していた。初日の夜の懇親会で挨拶をした鴻さんが会の後、所在なげにロビーにいるのを発見した。僕は鶴橋に繰り出す集団に属していたのだが、寂しそうな鴻さんを放っておけなかった。

聞けば最終日にニューヨークとオンラインで繋ぐため、明朝は8時にはスタンバイしておかなければならないという。朝が早い。あんまり鴻さんが早朝から活動している印象がなかった。ご本人もそれが不安らしく、ゲストハウスに1人で泊まっているから起こして欲しいと言われた。僕、新大阪からモーニングコールしに来るの！？恩師に頼まれれば断る理由はないので、覚悟を決めて引き受けた。

ゲスト・ハウスまでの道すがら、いつものようにたわいもない話をした。思えば稀有な時間だったのかもしれない。

学会の帰り。混雑する日曜夜の新大阪でだって偶然また会えたくらいだもの。そう思って連絡先は知っていたが、メッセージしたのはこの翌朝のモーニングコールだけだった。

演劇に携わっていれば、不思議といつでも劇場で会える。そう思っていた。だからすれ違っていても平気だった。

悔やむ。

あの役者より良い声で、昂揚するとやや上擦る声で、いつもどこでも一人でふらっと分け入っていき、朗らかな声で鋭い批評を展開し、周りに人が自然と集まっていた。それでいて極めて孤独で、私生活をまるで明かさない人。

懐深く、あらゆる時代のあらゆる表現に寛容な鴻さんの演劇感覚に触れた僕たちのような人間は、次世代に「演劇はこうあるべき」と狭い見識の中で自分の境界を押し付ける、器量の小さな演劇人にだけにはなってはならない。

そう、鴻英良こそ、広場だった。